

釋尊と諸佛の觀念

若 守 義 孝

普通に佛陀 Buddha と云ふときは、歴史的實在の佛陀、即ち釋尊を意味するのであるが、諸經卷を通じて現れ來る佛陀は、獨り釋迦牟尼佛のみでなく、他に數多くの諸佛がある。そこで、是れ等諸佛と釋尊とは、そも如何なる關係にあるやが、疾くより問題となつて、種々の立場から夫れれに解かれ、宗派の分立と同時に、各々其の教義や宗體の相異から、互に異つた本尊佛が立てられて居る。勿論佛教の本領は、有無を超え、主客一枚となつた信仰態度の純一性にあるのであるが、信仰對象に於ける觀念の確らしさ如何が、聽て又其の態度に影響せざるを得ないから、此の對象問題は、古くから論じられてゐるとは云へ、今の我等に取つて依然重要な意義を持つて居る。そこで先づ一般に、諸佛のイデオは、釋尊と如何なる關係にあるか、此の問題を茲に考へて見たい。

諸佛の中で、最も理解し易きは、人類の歴史に足跡を印せられた人間の佛陀、即ち釋尊である。周知の如く、釋尊は我等と齊しく人間に生れ、齊しく人間的欲情にさいなまれ、我等と齊しく不安に生きたのであるが、此の人間不安の根源を斷つべく、能く一切を打ち捨て、勇猛精進の結果、無上正等覺を成じて、佛陀となつたのである。佛陀は通例、覺者と譯されて居るが、此の觀念内容は、譯語の表面に顯はれて居るよりは、遙かに豊富の意味を含蓄して居る。即ち

开は自ら人間の苦因たる迷根を断ちて、法爾の眞理を證るのみでなく、又能く他を教へ導きて、同じく眞理を覺らしめんとする、所謂自覺と覺他の二行を完全に成就する解脱者の意である。釋尊が人間最初の解脱者として、其の限りなき智と徳と力に依つて、人の世に大なる光明を點じられたことは、今更云ふまでもないが、大無量壽經には、釋尊の威徳を彌勤に讃嘆せしめて、「佛陀は威神尊重にましく、説かれる所は實に明快であります。佛陀の教を聽き奉つて能く反省すると、佛陀の説かれる如く、人は皆三毒の事に隨つて道を得ずに居ります。今や佛陀の慈悲に依り、大なる道を示し下され、私達の心の耳も目も開け、長へに三毒の迷から脱することが出來ました。佛陀の教を歡ぶことは、私達のみでなく、上は天に住む神々から、下は虫虻の類に至るまで、皆厚き御恩を蒙つて、憂苦を解脱し得ました。實に佛陀の教誡は深きを極め、智慧は十方を見渡し、三世を通暢して、一切を盡し給はぬ所はない。今、私達が迷から離れることの出来るのは、佛陀が其の昔道を求め給ひし時、身を下して苦行せられたが爲めである。實に佛陀の恩は廣くして普く世を覆ひ、其徳は高くして山の如く聳え給ふ。佛陀の光明は、物の奥まで徹照し、空に達して證りに入るの門戸を開き給ふ。時には衆義を要攬して、懇切に教を垂れ、時には威徳を振つて忤れる者を制し、十方に互つて極りなく一切を感動せしめ給ふ。佛陀は法王なるが故に、如何なる聖者にも超え、普く人間天上の師となつて、心に願へば皆悉く道を得しめ給ふ。」時に釋尊彌勤に告げて、「今我れ此世に於て佛陀となり、經法を演説し、道教を宣説して、諸々の疑網を断ち、……………三界に遊歩して、如何なる者にも拘礙される事がない。」(大無量壽經下卷の一節取意)又大般涅槃經には、須達長者が「佛陀とは何ぞや」の問に對し、冊檀那 Sandhāna の應へに、「汝聞かぬや、迦毘羅城に釋種の子悉達

多……………後に欲樂を捨て、出家せられ、別に師とてなく、自ら阿耨多羅三藐三菩提を證り給ひ、貪瞋痴盡きて、何物にも憂畏する所なく、不生不滅常住不變で、諸々の衆生に對して、恰も父母の其の子等を等しく視る如くに、一切を平等に慈み給ふ。其の身に於ても心に於ても、一切の者に勝れて居られるが、毫も憍慢の風なく、其の智慧は十方に通達し、法に於て自由無礙で、十力、四無所畏、五智、三昧、大慈大悲及び三念處を具足し給ふ。此の故に佛陀と號するのである。」(師子吼品第二十三の三取意) 其の他諸經卷に於て、釋尊の洪德を讚嘆し、藝術的には三十二相、八十種好等、凡そ人間美的理想の極點を釋尊の人格に見、形而上的には時間空間を超越したる永遠の生命其者と見、宗教的には其の限りなき大悲心もて、一切衆生を濟ひ給ふと云ふ凡そ是れ等の諸徳相を觀念内容とせるが、佛陀の稱號である。簡言すれば、此佛陀は神か神に非ず、人か人に非ず、神人を超越したる、天にも地にも、此の宇宙内外に於ける如何なる者も、其の同等性を主張し能はぬ最尊最勝の者として、人間最初の解脫者たる釋尊に附せられた稱號である。若し佛陀てふ本質觀念よりせば、釋尊の如く一切を解脫し、正覺を成するならば、他の如何なる者も皆齊しく佛陀となる事が成立つも、歴史的に云へば、佛陀と稱せられるのは釋尊唯一人のみである。

然も傳に依れば、釋尊は最初の佛陀に非ずして、釋尊より過去に溯り、最初に毘婆尸佛(Vipāśyin)を擧げ、次に尸棄佛(Sikhin)毘舍浮佛(Viśvabhū)拘留孫佛(Krakucchanda)俱那牟尼佛(Kanakamuni)迦葉佛(Kāśyapa)に至るまで他の六佛を擧げ、其の次に釋尊を配して過去七佛と稱して居るが、是れ等諸佛は恐らく釋尊の證り給へる法其者の永遠性を人格的に表現した者と見るべきであらう。其の後、佛教教理の發達するに従ひ、各々其教理の建前から種々の

佛陀觀念が出来、獨り過去の諸佛のみならず、現在の諸佛、未來の諸佛が觀念せられ、三千佛名經には三千の佛名が擧げられ、遂に佛陀は無數無邊と見ねばならぬと云はるゝに至つた。斯く佛陀觀念の發達するに従ひ、其の哲學的組織的考察となつて現れたのが、種々の佛身觀である。最初の佛身觀は、釋尊を唯一の對象として考へたのであるが、後に諸佛のイデーが出来るに従ひ、種々の佛身觀となつた。先づ二身觀に於ては、佛陀を法身と生身（又は眞身と應身）に分け、生身の佛陀は應化身で、我れ等人間に相應して、我れ等と同じやうに生老病死しつゝ、衆生を濟度する歴史的人間佛陀であるが、法身の佛陀は人間佛陀の本地眞身で、生老病死の無常變化を超越した常樂我淨の本體佛であると見る。茲に釋迦牟尼佛は、此世に於ける應化身佛と見られ、其の本體は時間空間を超越した永遠普遍の法其者を體とする形而上的實在としての法身佛と考へられた。涅槃經に於ては此の法身佛を力説して、「善男子よ、如來身は是れ常住身である、壞れる事なき身で、金剛身である。雜食身でなくて、法身である。」と云ひ、又「如來の身は即ち金剛身である。汝今日より常に專心に此義を思惟して、食身を念じてはならぬ。亦人の爲めに如來身は即ち是れ法身であると説かねばならぬ。」（金剛身品第二取意）。斯く永遠普遍の法身佛陀を宣揚する事に依つて、釋尊の入滅に遭ひ、悲嘆絶望に陥れる者を勵ますと同時に、又一切衆生が皆佛陀となるべき可能性（佛性）あることが警告された。即ち衆生の現れは多様なるも、皆同一佛性があるとして、毒乳五味の例を引き、「衆生の佛性も亦復た是の如くて、五道に據りて、夫れく別異の身ではあるが、此の佛性は常一であつて、異なることはない。」（師子吼菩薩品第二十三の三取意）斯くて法身佛の觀念から、煩惱妄想しつゝある人間性其者の中に佛性ありと認められ、「一切衆生悉有佛性」の觀念が生れた。華嚴では「心佛衆生是三

無差別」と云ひ、禪では「卽心是佛」と云ふに至り、佛陀と我れ等とは、其の本質に於て一になるとて、宗教信仰の極地に達した。哲學的には、變化に卽して不變を、個に卽して全を見んとするので、理としては正に最究竟であるが、然も實際的には、一步錯ると邪道に陥る危険性がある。何となれば理としては、我れ等の穢れた心中にも、阿耨多羅三藐三菩提を成すべき種子があるにせよ、事實に於て釋尊の如き成正等覺者とは雲泥の差がある。釋尊にあつては、完全に磨き上げられた寶珠の如く、佛性其者が全體露現し居るも、我れ等の佛性は、謂はば山から掘り出された儘の素材たるにすぎない。此の素材を寶珠たらしめる爲めには、行の磨きをかけねばならぬ。そこで酬因感果の佛身、卽ち報身佛が觀念されて、三身觀となつたのである。

三身觀は、上述二身觀に報身を加へて、法報應の三身と爲すのであるが、平易に云へば、此の亞細亞に生れた釋尊は、其の佛陀と成つた後に於ても、我れ等と同じく、老病死と移り行けるが、其の内面に於ける靈覺、（無上正等覺）の嵩高雄大性は、何物も比較し得ざる永遠無限の意義價值を有する。斯る靈覺は、決して一朝一夕に成れる者ではない、永遠の過去から、あらゆる者に生れ變り、あらゆる生活を爲し、あらゆる生活を通じて創造された大人格者に依るので、此の過去長時に於ける修行の因に報ひられた結果として、佛陀となつたのである。換言すれば、一切衆生を濟はんとの大理想を立て、之を實現する爲めに、多劫の間奮闘努力し、所謂願行具足の因に依り、其の結果として、佛陀てふ大人格者を完成したと云ふのが報身佛の觀念である。

斯くて三身觀が出来たのであるが、此の他に四身乃至十身の説がある。四身觀では、前の三身に化身を加へて、法報

應化の四身とする。或は自性身、自受用身、他受用身、變化身とする考方もあるが、結局其の意味は同じである。更に十身觀に於ては、得果の上から佛陀を平等身、清淨身、無盡身、善修身、法性身、離尋伺身、不思議身、寂靜身、虛空身、妙智身と分ける。或は解の上から分けて、衆生身、國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虛空身とするが、又行の上から佛陀を菩提身、願身、化身、力持身、相好莊嚴身、威勢身、意生身、福德身、法身、智身と分けて考へる。斯くて佛陀の境界を種々の方面から觀念し、種々の佛身觀が出来たのであるが、四身も十身も、結局は三身に歸著せられ、現行の大乗佛敎にては、普通に三身觀が基礎となつて居る。然も諸佛のイデーを此の三身觀に當て填め、其の何れを本位とするかに至り、敎理や宗體の相異から、夫れ々々異なつた見方が成立つ。例へば密敎にては、釋迦牟尼佛を阿彌陀佛、阿閃佛と同じく、法身佛たる毘盧舍那 (Vairocana 大日と譯す) の一應化身と見、法身大日佛陀を本尊として、夫れから他の諸佛を説くが、顯敎にては一般に釋迦牟尼佛を本位として、夫れから他の諸佛を説く。又淨土敎にては、彌陀如來を報身と見、阿彌陀佛を本尊とする。

斯くの如く種々の佛陀觀が出来、三身觀の組織となつたのであるが、三身も畢竟は一佛陀に歸著する。而して一切諸佛は其の多樣なるが儘に、其の本質は一であることになる。故に經には、「諸佛の體は一であつて、別異でない。」(金剛明經第一卷取意)。「諸佛は唯だ是れ一佛陀で、一切佛土は唯だ一佛土のみである」(寶積經第八六卷取意)と云へる如く、諸佛の現るゝ姿は多樣であつても、其の本質は一佛陀であると早くから觀念されて居たらしい。元來、諸佛は其の名の異なるが如く、其の形相姿態に於て多樣に表現されるが、其の智慧德相に於ては、共通の本質を有つて居る。开は是等

諸佛が、何れも無上正等覺を成じて、四無所畏、五智、十力等の佛徳を圓滿し、其徳を一切に加被して、衆生の苦本を抜かんとすることである。而して諸佛の此の本質徳相は、歴史的人間佛陀たる釋尊を通じて觀念された者で、釋迦牟尼佛が一切諸佛に同様に妥當する軌範である。此の事は、既に前掲諸種の佛身觀の上に現はれて居る。即ち二身觀にせよ、三身觀にせよ、乃至十身觀にせよ、釋尊が佛陀觀念の基調となつて居ることは、容易に看取される。勿論、諸佛中には本來の佛陀觀念のみでなく、古代の神話や、象徴や、種々藝術的構想の加味されて居る者もあるが、佛陀としての本質は、本來の佛陀觀念を通有する所にある。従つて、釋尊に於て用ひられた佛陀なる稱號は、全く新しき者で、眞に本源的であつて、諸佛のイデーは、此の本源的佛陀觀念を形而上化し、若しくは特殊化した者と見るべきであらう。

道元禪師は「いはゆる諸佛とは、釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛これ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛、ともにほとけとなるときは、かならず釋迦牟尼佛となるなり。」(正法眼藏即心是佛の卷末段)と示されて居るが、釋尊は三世諸佛の軌範であると同時に、特に又我れ等人間の軌範であらねばならぬ。釋尊は我れ等と齊しく人間に生れ、齊しく人間の悩みを悩みつゝ、人間生活の意義、價值を如實に見、無上正等覺を成じて佛陀となつたのである。而して凡ての人類を眞實に活かす爲め、縁に觸れ機に應じて、正覺への道を縦に横に説き示された。今や遺教相傳はりて、既に二千五百年を経過したるが、此の後尙ほ永遠に、凡ての人類に妥當すべき完全生活の最高軌範であるであらう。人の境遇の如何に拘らず、釋尊の教法に實參し、开を體現することほど、世に麗はしく尊いことはない。

(昭和九年十一月五日稿)